

令和元年度学校保健統計調査結果

全体的に全国値より低体重

—女子の体重が全年齢で全国平均を下回る—

府企画統計課生活統計担当

はじめに

この度、令和元年度学校保健統計調査結果がまとまりましたので、その概要をお知らせします。

学校保健統計調査（統計法に基づく基幹統計調査）は、学校保健安全法により各学校が毎年4月から6月の間に実施している健康診断の結果に基づき、幼児、児童及び生徒の発育及び健康状態を明らかにし、学校保健行政のための基礎資料を得ることを目的として、文部科学省が都道府県を通じて調査を実施しています。

調査対象として抽出された府内の国・公・私立の学校 164 校の幼児、児童及び生徒についての発育状態調査（身長・体重）及び健康状態調査（各種の疾病・異常）の結果を掲載します。

調査対象幼児・児童・生徒数は表1のとおりです。

表1 調査対象幼児・児童・生徒数

(単位：校、人)

区分	調査実施 学校数 (校)	調査対象者数(人)					
		発育状態調査			健康状態調査		
		合計	男子	女子	合計	男子	女子
幼稚園	34	1,325	653	672	1,929	975	954
小学校	60	5,452	2,721	2,731	28,672	14,027	14,645
中学校	40	4,740	2,340	2,400	20,170	9,974	10,196
高等学校	30	2,563	1,260	1,303	26,473	12,729	13,744
合計	164	14,080	6,974	7,106	77,244	37,705	39,539

注：幼稚園には幼保連携型認定こども園を含む。

発育状態

1 身長・体重の京都府平均値及び全国との比較

令和元年度の幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の幼児、児童及び生徒の身長及び体重の京都府平均値を年齢別にみると、第1表及び第2表のとおりです。（第1表、第2表）

【身長】

男子は前年度と比較すると、全年齢を通して前年度並みです。各年齢間の身長差は11歳と12歳の間（7.5cm）が最も大きく、次いで12歳と13歳の間（7.1cm）が大きくなっています。全国平均値と比較すると、6歳、7歳10歳及び16歳で上回っています。

女子は前年度と比較すると、小学校及び中学校では下回る傾向が、高等学校では上回る傾向がみられます。各年齢間の身長差は9歳と10歳の間（7.2cm）が最も大きく、次いで10歳と11歳の間（6.8cm）が大きくなっています。全国平均値と比較すると、11歳、14歳から17歳で上回っています。

10歳及び11歳では女子の身長が男子の身長を上回っています。

【体 重】

男子は前年度と比較すると、全年齢を通して前年度並みです。各年齢間の体重差は、12歳と13歳の間(5.5kg)が最も大きく、次いで14歳と15歳の間(5.2kg)が大きくなっています。全国平均値と比較すると、16歳を除いた全ての年齢で下回っています。

女子は前年度と比較すると、5歳から7歳、11歳及び16歳を除いた全ての年齢で下回っています。各年齢間の体重差は、10歳と11歳の間(4.9kg)が最も大きく、次いで9歳と10歳の間(4.4kg)が大きくなっています。全国平均値と比較すると、全ての年齢で下回っています。

11歳では女子の体重が男子の体重を上回っています。

2 肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率

肥満(痩身)傾向児とは、性別・年齢別・身長別標準体重から求めた肥満度が20%以上(-20%以下)の者のことで、 $\frac{(\text{実測体重} - \text{身長別標準体重})}{\text{身長別標準体重}} \times 100$ により計算します。(第3表)

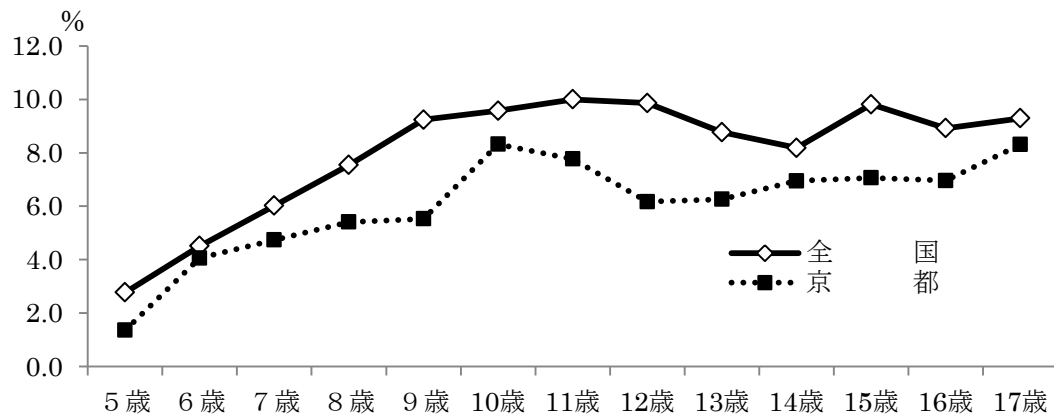
【肥満傾向児】

肥満傾向児の出現率は、男子では17歳(10.1%)が最も高くなっています。女子では11歳(7.8%)が最も高くなっています。

全国の出現率と比較すると、男子では全ての年齢で下回っています。また、女子では6歳を除いた全ての年齢で下回っています。また、男女計でも、全ての年齢で全国値を下回っています。

なお、女子の16歳は全国で最も低い数値です。

図1 肥満傾向児の全国比



【痩身傾向児】

痩身傾向児の出現率は、男子では10歳(4.7%)が最も高くなっています。女子では12歳(5.3%)が最も高くなっています。

全国の出現率と比較すると、男子では6歳、8歳、13歳及び15歳を除く全ての年齢で上回っています。女子では6歳及び7歳を除く全ての年齢で上回っています。また、男女計では、6歳及び13歳を除く全ての年齢で全国値を上回っています。

なお、男子の12歳は、全国で最も高い数値です。

図2 痩身傾向児の全国比

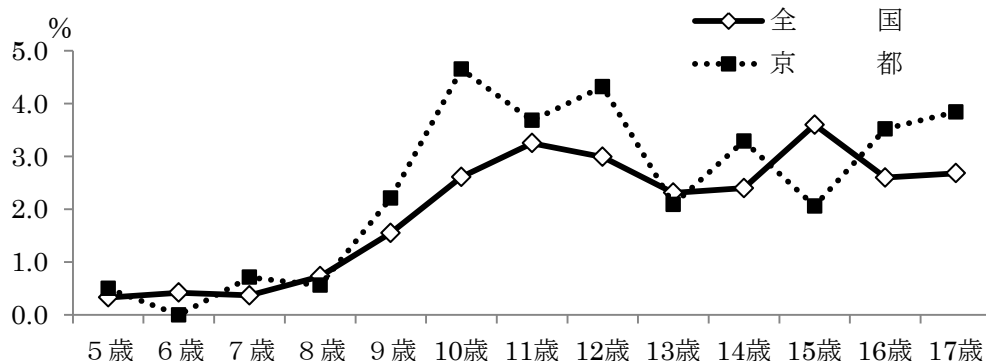


表2 年齢別肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率

(単位：%)

	男子				女子			
	肥満傾向児		痩身傾向児		肥満傾向児		痩身傾向児	
	京都府	全国	京都府	全国	京都府	全国	京都府	全国
5歳	1.39	2.63	0.50	0.33	1.34	2.93	0.47	0.31
6歳	3.83	4.68	—	0.42	4.30	4.33	0.64	0.56
7歳	4.41	6.41	0.71	0.37	5.09	5.61	0.23	0.45
8歳	5.37	8.16	0.56	0.73	5.45	6.88	1.52	1.09
9歳	6.21	10.57	2.21	1.55	4.83	7.85	1.98	1.65
10歳	9.70	10.63	4.65	2.61	6.90	8.46	3.32	2.71
11歳	7.72	11.11	3.68	3.25	7.83	8.84	3.08	2.67
12歳	6.96	11.18	4.32	2.99	5.34	8.48	5.34	4.22
13歳	6.65	9.63	2.09	2.31	5.87	7.88	3.98	3.56
14歳	7.34	8.96	3.29	2.40	6.56	7.37	3.26	2.59
15歳	8.07	11.72	2.06	3.60	6.01	7.84	3.78	2.36
16歳	9.43	10.50	3.52	2.60	4.39	7.30	2.01	1.89
17歳	10.14	10.56	3.84	2.68	6.44	7.99	2.38	1.71

注：肥満(痩身)傾向児とは、性別・年齢別・身長別標準体重から肥満度を求め、肥満度が20%以上(-20%以下)の者である。
 肥満度=(実測体重-身長別標準体重)÷身長別標準体重×100(%) 京都の太字は全国最小値又は最大値

(参考) 10年前の体重との比較

今回の調査結果を、10年前の平成21年度の結果と比較すると、男子では9歳から11歳で、女子では6歳、7歳、10歳、11歳、14歳及び15歳で体重が増加しています。(参考表)

(参考表) 年齢別体重の10年前との比較(京都府)

(単位：kg)

	令和元年度		平成21年度		差	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
5歳	18.4	18.3	19.0	18.6	△0.6	△0.3
6歳	21.1	20.8	21.3	20.5	△0.2	0.3
7歳	23.8	23.3	23.8	23.2	—	0.1
8歳	26.7	25.8	26.8	26.6	△0.1	△0.8
9歳	30.1	29.4	29.9	29.5	0.2	△0.1
10歳	34.2	33.8	33.4	33.3	0.8	0.5
11歳	37.8	38.7	37.5	38.6	0.3	0.1
12歳	42.9	42.9	43.0	43.4	△0.1	△0.5
13歳	48.4	46.5	48.5	47.1	△0.1	△0.6
14歳	52.9	49.5	53.0	49.3	△0.1	0.2
15歳	58.1	51.3	59.4	51.1	△1.3	0.2
16歳	60.7	51.7	61.3	52.6	△0.6	△0.9
17歳	62.3	52.7	62.7	53.6	△0.4	△0.9

3 親の世代(30年前の平成元年度の数値)との比較

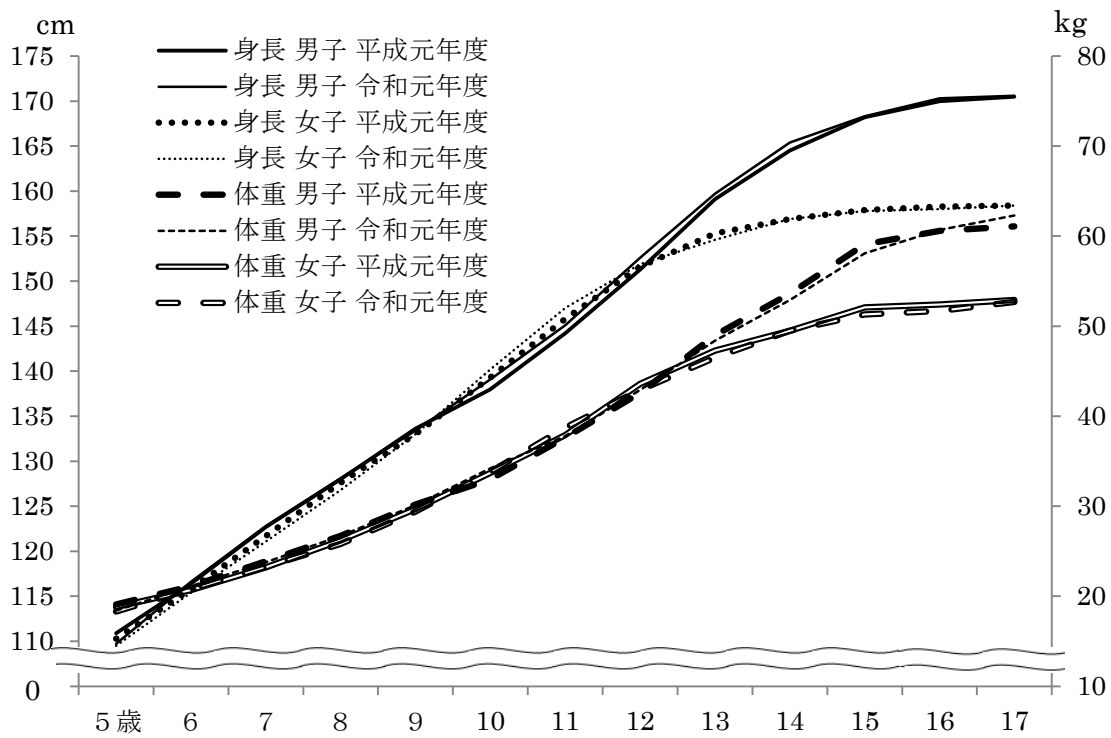
【身長】

令和元年度の身長を親の世代(30年前の平成元年度の数値)と比較すると、最も差がある年齢は、男子では12歳で親の世代より1.3cm高く、次いで5歳で1.2cm低くなっています。女子では11歳で親の世代より1.2cm高く、次いで10歳で0.9cm高くなっています。

【体重】

令和元年度の体重を親の世代と比較すると、最も差がある年齢は、男子では10歳及び17歳で親の世代より1.2kg重く、次いで15歳で1.0kg軽くなっています。女子では11歳で親の世代より0.8kg重く、13歳及び15歳で0.8kg軽くなっています。(第4表)

図3 年齢別体格の状況

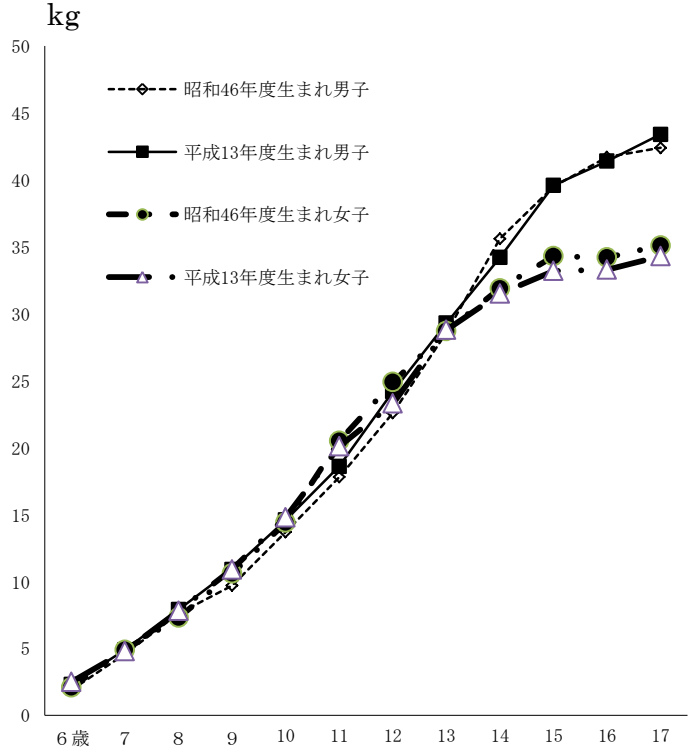
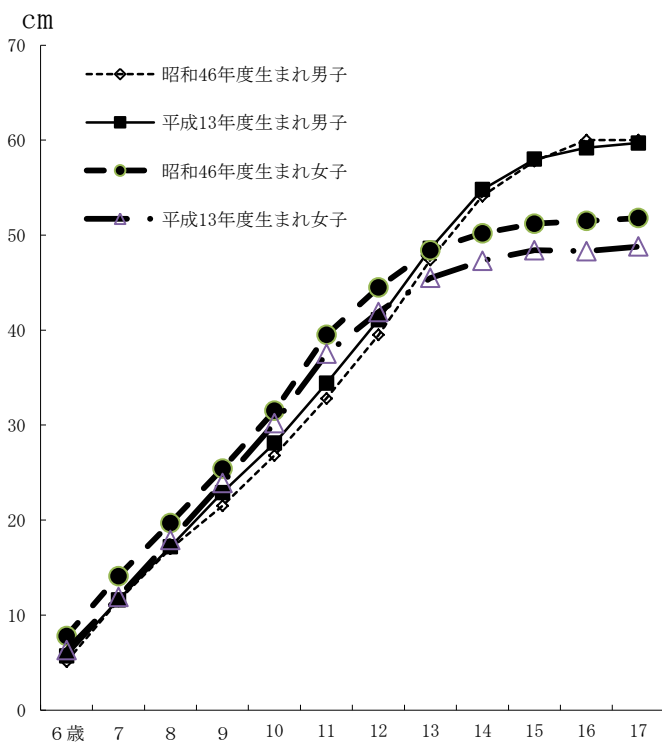


4 発育量の累計、親の世代との比較

平成13年度生まれの者（令和元年度17歳、以下「子の世代」という。）と昭和46年度生まれの者（平成元年度17歳、以下「親の世代」という。）の5歳から17歳までの発育量の累計を比較すると、男子は親の世代が身長で0.3cm上回っていますが、体重では子の世代が1.0kg上回っています。女子は親の世代が身長で3.0cm、体重で0.8kg上回っています。（第5表、第6表）

図4 発育量の累計、親の世代との比較（身長）

図5 発育量の累計、親の世代との比較（体重）



注：「6歳」は5歳から6歳の発育量、「7」は5歳から7歳の発育量の累計、以下同様。

健康状態

1 疾病・異常の被患率等別の状況

疾病・異常を被患率等別にみると、「むし歯（う歯）」と「裸眼視力 1.0 未満の者」が他の疾病・異常に比べて高く、各学校段階で最高か、それに次ぐ高さとなっています。（表 3）

2 主な疾病・異常等（第 7 表、第 8 表）

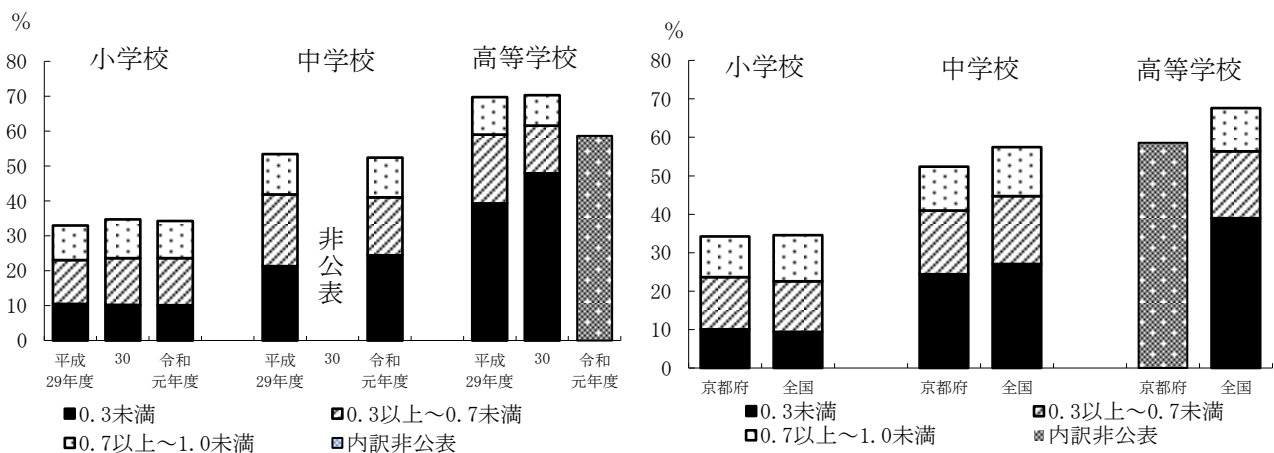
【裸眼視力 1.0 未満】

令和元年度の「裸眼視力 1.0 未満の者」の割合は、小学校 34.2%、中学校 52.4%、高等学校 58.6%となっています。なお、幼稚園は疾病・異常被患率の標準誤差が 5%以上のため非公表となります。前年度と比べると、比較可能な小学校及び高等学校のどちらでも下回っています。平成 29 年度からの推移でも、減少傾向がみられます。

全国平均値との比較では、京都府は比較可能な小学校、中学校及び高等学校で下回っています。

図 6 裸眼視力 1.0 未満の者の推移図

7 裸眼視力 1.0 未満の者全国比



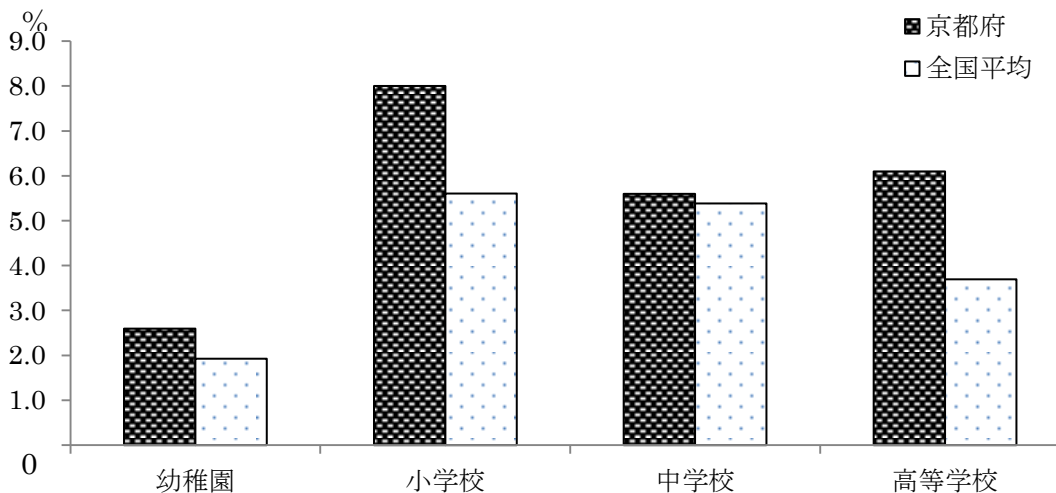
※非公表の裸眼視力 1.0 未満の者の割合については、疾病・異常被患率等の標準誤差が 5%以上、受検者数が 100 人（5 歳は 50 人）未満または回答校が 1 校以下のため統計数値を公表していません。

【眼の疾病・異常】

令和元年度の「眼の疾病・異常」の者の割合は、幼稚園 2.6%、小学校 8.0%、中学校 5.6%、高等学校 6.1%となっており、前年度と比べると幼稚園及び小学校で減少しています。

全国平均値と比較すると、京都府は全ての学校段階で上回っています。

図 8 眼の疾病・異常の者全国比



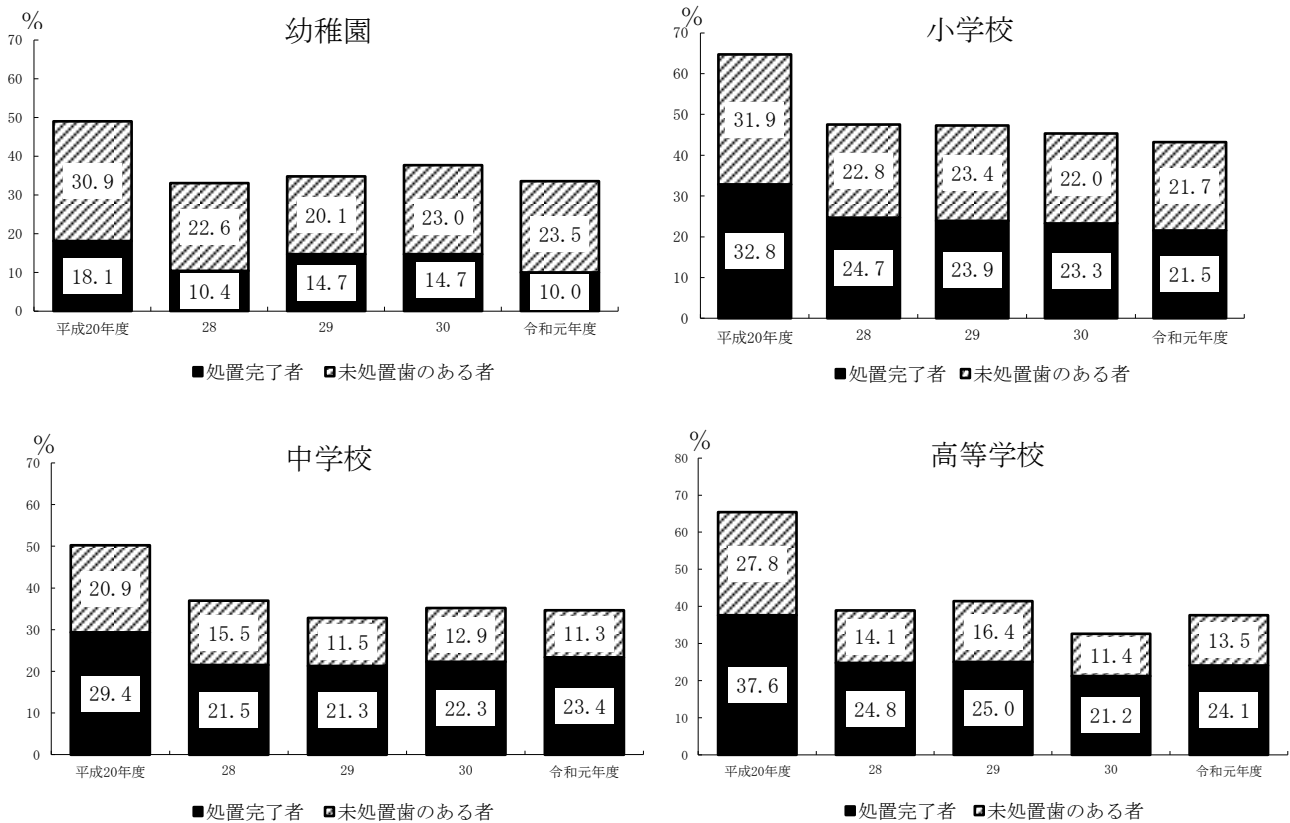
【むし歯（う歯）】

令和元年度の「むし歯」の者の割合（処置完了者を含む。以下同様）は、幼稚園 33.5%、小学校 43.2%、中学校 34.7%、高等学校 37.6%となっており、前年度と比べると高等学校を除く学校段階で減少しています。

平成 20 年度からの推移をみると、各学校段階で減少傾向がみられます。

全国平均値と比較すると、京都府は小学校及び高等学校で下回っています。

図 9 むし歯（う歯）被患率の推移

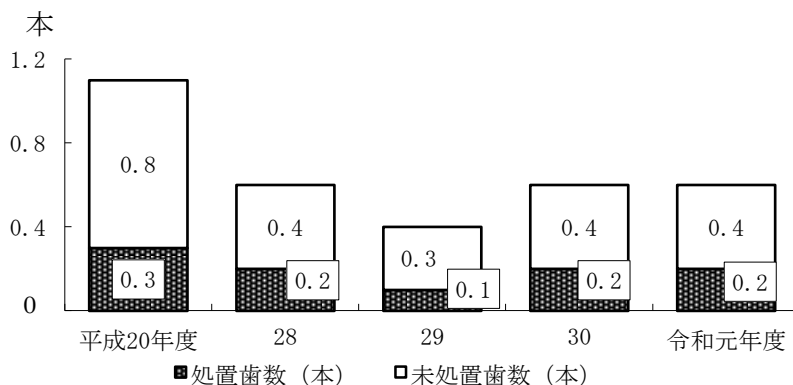


【12歳の永久歯の1人当たり平均むし歯（う歯）等数】

12歳の永久歯の1人当たり平均う歯等数（喪失歯及び処置歯数を含む）の「むし歯」数をみると、0.6本となっており、平成20年度と比較すると0.5本減少しています。

「むし歯」数について全国平均値と比較すると、京都府は0.1本下回っています。

図 10 12歳の永久歯の1人当たり平均むし歯（う歯）等数



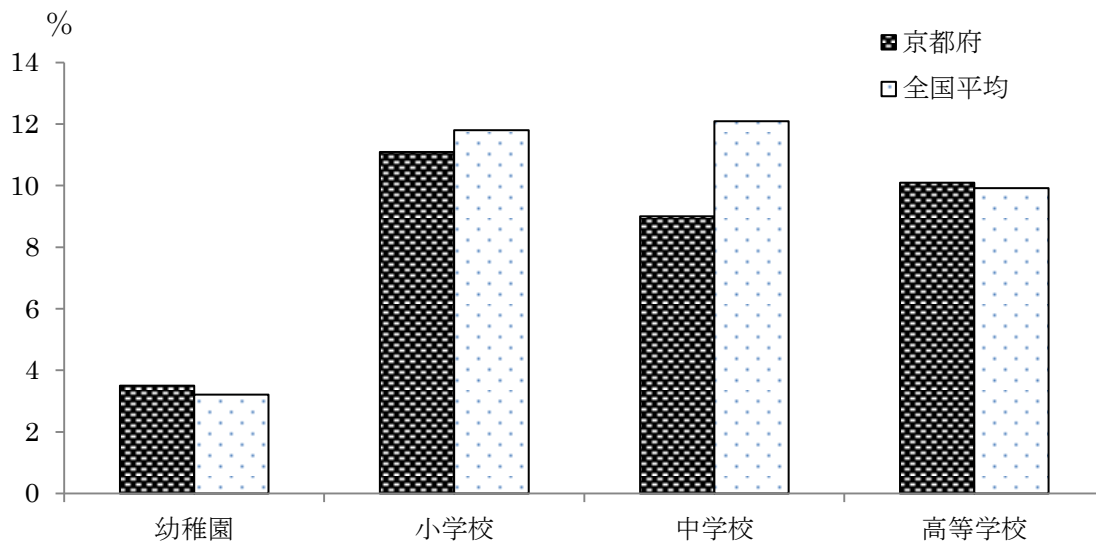
注：端数の関係で内訳の計と合計が一致しない場合があります。

【鼻・副鼻腔疾患】

令和元年度の「鼻・副鼻腔疾患」（蓄のう症、アレルギー性鼻炎等）の者の割合は、幼稚園 3.5%、小学校 11.1%、中学校 9.0%、高等学校 10.1%となっています。前年度と比べると、小学校を除く学校段階で増加しています。

全国平均値と比較すると、小学校及び中学校で下回っています。

図 11 鼻・副鼻腔疾患全国比

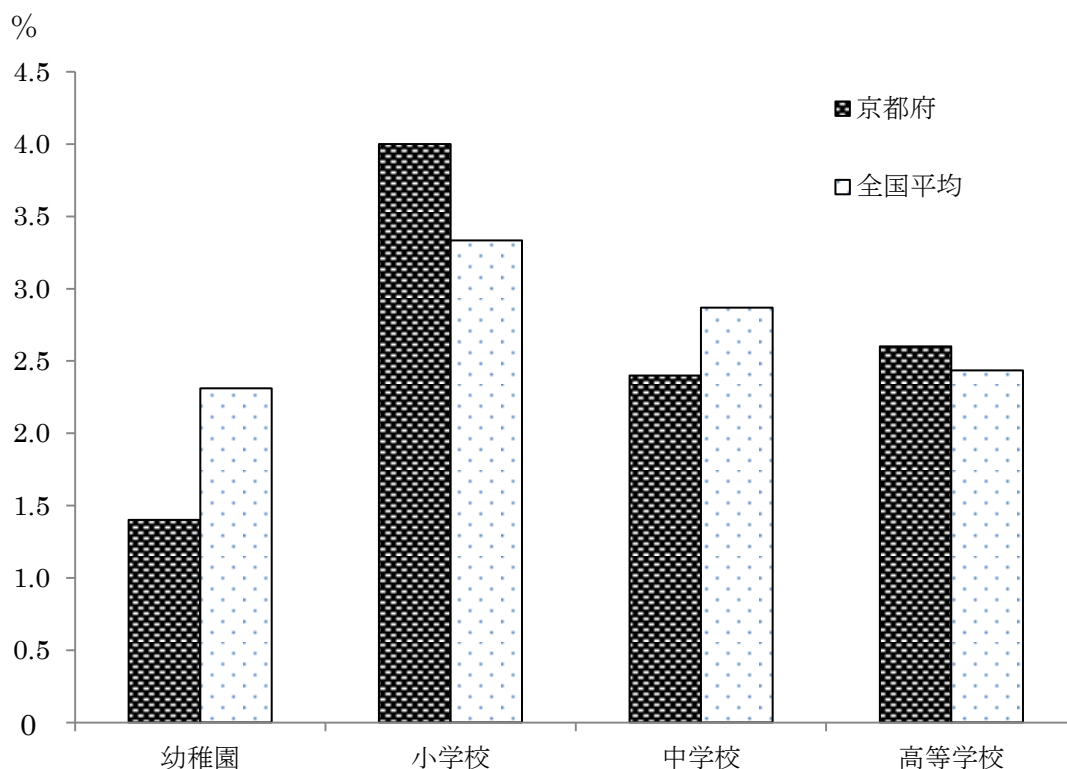


【アトピー性皮膚炎】

令和元年度の「アトピー性皮膚炎」の者の割合は、幼稚園 1.4%、小学校 4.0%、中学校 2.4%、高等学校 2.6%となっています。前年度と比べると、全ての学校段階で減少しています。

全国平均値と比較すると、幼稚園及び中学校で下回っています。

図 12 アトピー性皮膚炎全国比

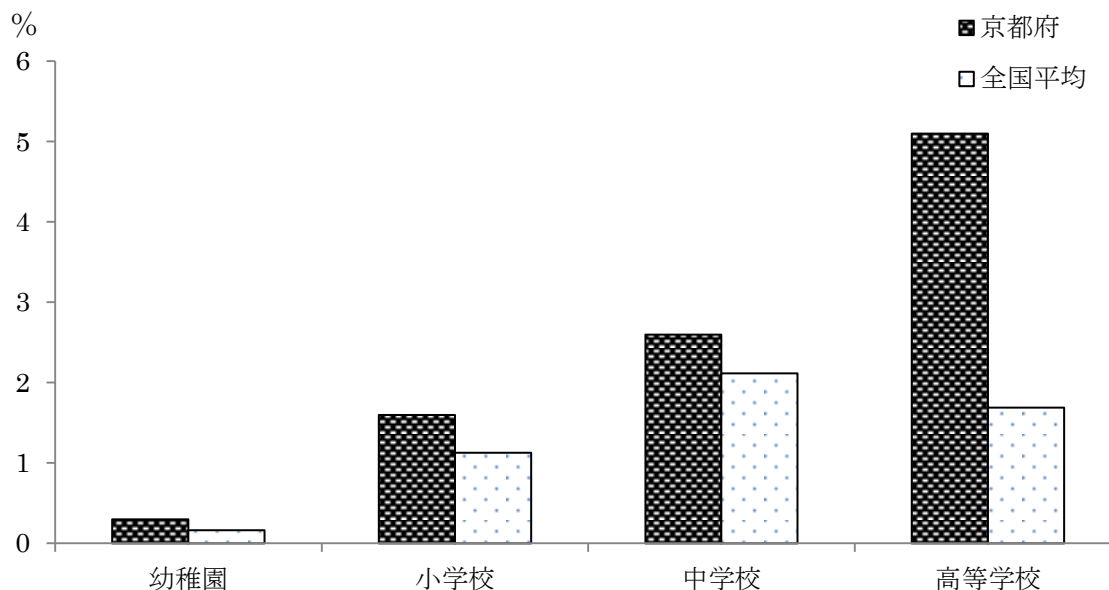


【せき柱・胸郭・四肢の状態】

令和元年度の「せき柱・胸郭・四肢の状態」異常の者の割合は、幼稚園0.3%、小学校1.6%、中学校2.6%、高等学校5.1%となっています。前年度と比べると、幼稚園以外で増加しています。

全国平均値と比較すると、全ての学校段階で上回っています。

図13 せき柱・胸郭・四肢の状態全国比



【ぜん息】

令和元年度の「ぜん息」の者の割合は、幼稚園1.3%、小学校3.0%、中学校3.1%、高等学校1.8%となっています。前年度と比べると、中学校を除く学校段階で減少しています。

全国平均値と比較すると、幼稚園及び小学校で下回っています。

図14 ぜん息全国比

